

中国東北3省（瀋陽・長春・ハルビン・方正）

5日間の県日中訪中団記録

令和元年10月24日～10月28日



「遼寧かささぎ会」との交流会記念撮影

佐賀県日中友好協会主催

県訪中団に参加して

理事長 堤 清行

「会員の少ない地区では、訪中団を派遣するのは難しい。県で計画してもらいたい」との声に答えて、5年ぶりに、県日中訪中団を計画しました。今回は、平成26年9月の「世界自然遺産張家界・五稜郭及び上海5日間の旅」で11名の参加でした。

久しぶりなので、行き先は、日本と歴史的に関係の深かった東北3省、訪問先には、佐賀県の友好交流省である遼寧省への県の訪問に随行して、現地の佐賀県応援団「遼寧かささぎ会」との交流会にも参加して、県日中訪中団にふさわしい県政への協力、貢献をすることにしました。併せて、先の大戦末期に帰国出来ず亡くなられた開拓民の公墓を訪問し、冥福を祈るとともに戦争の悲惨を再確認しました。

参加者は、篠塚会長夫妻以下13名で、感想文に頂いたように、幼少期を過ごした中国を再確認したいと参加された方などそれぞれの思いがあり、和やかで意義のある旅となりました。私自身は16回目の訪中、平成19年の協会入会后12回目で、うち県または佐賀地区日中の訪中団に参加したのは7回目となります。他は多久市日中、九州日中や県の瀋陽事務所開設記念などのツアーに参加したものです。80歳を超えてからの訪中は初めてで、階段で蹴躓いたり、もう人様のお世話は無理だと自覚しました。

旅の思い出は、平成20年6月に県日中で、ほぼ同じコースを旅しました。超満員の長い列車で、車窓から大平原に沈みゆく太陽を数時間眺め、これが歌に残る「赤い夕陽の満州」かと感慨に浸りましたが、今回は、高速、快適な新幹線で、駅には人影も少なく、瀋陽から長春、長春からハルピンを1時間余で通過し、便利さの奥に旅の旅情が失われるなどあの混雑が懐かしく贅沢な感想を持ちました。

一番印象に残るのは、黒竜江省方正県にある日本人公墓訪問です。華やかな欧米風の街ハルピンから、高速道路で3時間走った小高い丘陵の一角にそれはありました。高速道路の途中に橋梁が全くなく、方正県近くで、やっと近くに山が見える平原です。広い農地に囲まれています。この土地に、明るい未来を信じて入植した開拓民、公墓の取り扱いに見る周辺住民の気持ちを考えると尚更、帰国が果たせなかった数千の同胞の無念の思いに心痛み、心からの哀悼の祈りを捧げました。

参加された皆様のご協力に感謝し、これからも会員皆様の記憶に残る有意義な旅を提供できることを祈っています。

佐賀県日中友好協会2019年訪中国帰国報告「中国東北地方の旅～佐賀県日中友好協会訪中国」

第1回「それぞれの思い」

【リード】

佐賀県日中友好協会（篠塚周城会長）は2019年10月下旬、中国東北地方に訪中国を派遣した。佐賀県と友好関係にある遼寧省人民政府を表敬訪問し、現地市民でつくる「遼寧かささぎ会」と交流。遼寧省瀋陽、吉林省長春、黒竜江省ハルビンの3都市を訪ねた。先の終戦前後に「満州」と呼ばれた地域で死亡した日本人を祀（まつ）った「日本人公墓」にも参拝し、苦難に満ちた歴史をたどる旅となった。その報告記をまとめた。

【本文】



活気にあふれる瀋陽の旧奉天城内夜景



互いに友好パートナーシップ協定を結び、瀋陽に県の事務所を開設した。その5年後には残念ながら廃止となったが、毎年3月の「さが桜マラソン」には、遼寧省の選手を招待するなど友好関係が続いている。



知って心が騒いだという。「引き揚げの苦勞は思い出したくないものだった。でもいい機会だと思ひましてね。あの満州の地を見たくなった」と胸の内を語った。

「ああ、ここはもう紅葉してるね」。感嘆にも似た声が、訪中国員の一人からもれた。10月24日、福岡空港を出発し、韓国・仁川空港を経由して空路、遼寧省の省都・瀋陽に入った訪中国。空港からバスで街の中心部来到ると、木々が黄や橙（だいたい）に色づいている。北海道と同じ緯度にあたるこの地。すでに晩秋であり、冬はもうすぐそこだ。「今年は冬の訪れが少し遅い」と現地ガイドの李さん。団員の胸はこれから始まる旅への期待で高鳴っていた。

今回の訪中国は篠塚会長を団長に、総勢13人。同協会の役員や会員もいれば、募集に応じた一般団員もいる。同協会が訪中国を派遣するのは5年ぶり。今回、東北地方にこだわったのは篠塚会長だった。会長が県議会議員だった当時、佐賀県と友好関係を結んでいる遼寧省を訪ね、「心温まる歓迎をしてくれた」という現地を再度訪れ、友好の絆を太くしたいとの思いがあったという。たまたまだが、県も遼寧省との交流の機会を探っていて、両者の思いが一致した形だ。

佐賀県は1995年から同省と交流し、2011年には

今回は県の国際交流当局とともに省政府を表敬訪問し、現地市民でつくる「佐賀県応援団」ともいえる団体「遼寧かささぎ会」と交流するというのが主な目的である。

参加した団員の思いはそれぞれだった。一般団員の江原道郎さん（79）＝佐賀市＝は旧満州の通化（現吉林省）の生まれ。5歳の時に現地で終戦を迎え、1年かけて佐賀に引き揚げ、その途中、栄養失調で弟を亡くすという苛烈な体験を忘れられずにいた。佐賀新聞に載った告知記事で今回の旅を

同じ一般団員の中島明彦さん（74）＝吉野ヶ里町＝も旧満州の北安（現黒竜江省）の生まれ。終戦時は1歳で、こちらも引き揚げ組。「今回は観光旅行ではなく、生まれた時からの自分を振り返る旅」と位置付けての参加だ。

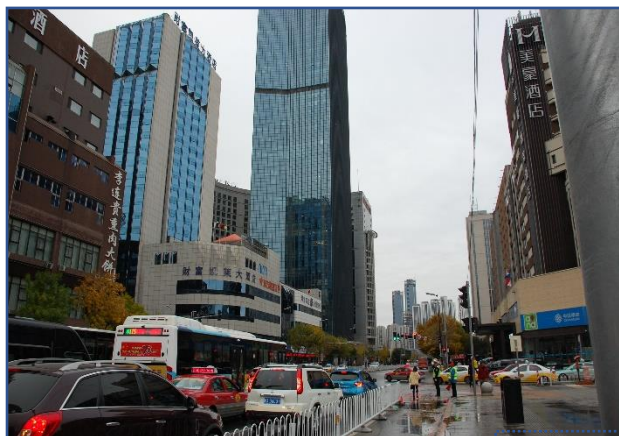
中島さんの友人の吉田寿次さん（77）＝佐賀市＝は、NHKのシルクロードのドキュメンタリー番組で中国の西域にあこがれた。詩吟が趣味で、漢詩も自ら作るほど。ほかにも親戚に満州から引き揚げた人がいて関心を深めたり、古代中国に材をとった小説や中国の歴史や文化が大好きという人もいる。



同協会会員には、高校教師出身で中国の大学の日本語学科で教えた金丸安隆さん（74）＝神埼地区日中、太極拳に目覚め訪中を重ねる小島利津さん（伊万里地区日中）、同じく伊万里地区日中の松尾チエ子さんも中国語を学ぶなど、彼の地に何らかの縁がある人が多い。一人ひとり、旅への思いは違うが、自分の目で変貌著しい今の中国を見てみたいという好奇心は共通する。「自費を払ってでも、どうしても行きたかった旅だ」。そう誰かが話したが、それはみんなの思いである。

翌日には、遼寧省政府への訪問が待っていた。

（文責・県日中編集部）



瀋陽市内の朝の風景



訪中国帰国報告

第2回「佐賀応援団」

【本文】

瀋陽入りして2日目の朝、訪中国員13人は県の交流メンバーとともに、遼寧省人民政府で国際交流を担当する外事弁公室を表敬訪問した。省政府の敷地内には、一般市民は許可なしには立ち入れないようだ。県とは別のバスで門の中に入る。木立の中に建物が立ち並ぶ、静かな所だった。一行は立派な部屋に通され、対応したのは胡元元・外事弁公室アジア処副処長とその下の宋依陽氏、于露氏の3人である。



遼寧省外事弁公室アジア処の胡元元副処長（中央）

産の梨を販売したこともあるそうだ。今年に1回は佐賀を訪れているといい、「いつの日か、県事務所が復元できることを信じています。これからもいろいろ交流して友好を進展させたい」と語った。



佐賀県地域交流部の南里隆部長挨拶

「ようこそ遼寧省へ来ていただきました」。胡氏は眼鏡をかけて、いかにも才女という感じだが、とてもフレンドリーで歓迎の言葉は流暢な日本語だった。1995年から始まった同省と佐賀県との交流は、2011年の友好パートナーシップ協定締結まで進んだ。彼女は日本担当としての自身の歩みも織り交ぜながら、思い出をうれしそうに披露してくれた。なんでも、佐賀県が設置していた瀋陽事務所（2016年廃止）の当時の日本人所長と、瀋陽で最も大きいスーパーで佐賀

これに対し、県地域交流部の南里隆部長は「これまで県職員9人を遼寧省で受け入れてもらい、みな県の幹部になっています。今後も人と人との交流が進んでいけば」と応じ、県日中友好協会の篠塚周城会長も中国建国70年を祝う会を開いたことを紹介するなど、協会が取り組む交流事業を紹介。「官は官、民は民で交流すれば、日中関係はもっと発展していくと思う」と語りかけた。1時間ほどの滞在だったが、最後は玄関前で日中の全員がそろって記念撮影をし、省政府を後にした。普段はけっして入れない場所で懇談することができ、協会訪中国員は少なからず感激した様子だった。



佐賀県日中の篠塚周城会長挨拶

遼寧省「かささぎ会」との交流会はその日の夜に瀋陽市内であった。同会員は14人ほどで、これまで佐賀県に派遣された省政府職員や佐賀大に留学した経験のある人たちなどで構成。いわば現地市民でつくる佐賀応援団である。

2012年に発足し、県として関係をつなぐ必要があり、3年ぶりの顔合わせとなった。この日は県、県日中友好協会、遼寧省外事弁公室、日本の瀋陽総領事館の関係者を含め総勢40人ほどが、料理と協会会員が持ち込んだ佐賀の酒を囲んだ。南里部長が佐賀県政の取り組みを紹介するなどして歓談に移ると、それぞれのテーブルで日本語や中国語が飛び交い、話の輪が広がる。



「遼寧かささぎ会」との交流会では料理と佐賀の酒を囲み和気藹々と歓談

瀋陽近郊、本溪市職員の包海城さん（４３）は、２００６年に半年間、佐賀県環境センターに派遣された。「今もセンターの当時の課長と一緒に旅行するなど交流が続いています。唐津への海水浴にセンターの仲間と何回も行った。カニなど海鮮を焼いて食べたのが思い出です」と語った。

瀋陽で科学分野の研究者をしている岳佳妃さん（３７）は２００３年から６年間、佐賀大で学んだ。「佐賀市民の親切が特に印象に残っている。ノリがおいしいし、お菓子の佐賀錦が好物。嬉野温泉など佐賀の温泉が大好き」と言い、「私の結婚式に佐賀の友人４人が来てくれました」と声を弾ませた。

日中友好協会の一般団員も交流を深めた。漢詩づくりが趣味の吉田寿次さんは外事弁公室の職員に自作の詩を見せ、「ちゃんと韻を踏んでいますね、とほめられたよ」とうれしそうだった。それぞれが両国の友好のために役割を果たしたいとの思いを深めた夜。ごく普通の人と人とのつながりこそが、政治をこえて国と国との関係を支えていく。まさに「草の根」という言葉が浮かんだ。（文責・県日中編集部）



遼寧省外事弁公室、日本の瀋陽総領事館の関係者、「かささぎ会」の皆様と記念撮影

訪中団帰国報告

第3回「清朝の源流の街・瀋陽」

【本文】



北陵公園・清朝二代皇帝・太宗

訪中団は2日目、瀋陽で清朝二代皇帝・太宗（ホンタイジ）の陵墓である北陵公園へ向かった。墓といっても世界遺産で、広場のようにゆったりと造ってある。

陵墓へ続く道を1・5kmほど歩くと、神橋が見えてくる。ここが墓の入り口だ。風水にもとづいて北に山、その南に湖が位置する。こういうスケールの大きな土木工事ができるところが王の権力だろう。

道の両側に獅子、麒麟、白馬、ラクダ、ゾウなどの石彫が置かれ、清の時代の建築物とともに中国らしい雰囲気醸し出している。「子どもの頃、よくここに遊びに来ましたよ」と現地ガイド

の李さん。瀋陽市民の、いわば憩いの場所でもある。

広場のコンクリート地面に、モップのような筆で墨代わりに水をつけ字を書くおじさん



北陵公園・コンクリート地面に水で習字

と出くわし、みんな面白がって写真を撮ったり、すっかりリラックス。「ここはいい所だ。こんなことなら女房を連れてくれば良かった」。そう言ったのは、一般団員で県庁OBの原田彰さん（72）＝佐賀市＝。「彼は愛妻家なのかなあ」。団員の一人がそうつぶやいて笑いが出たり、和気あいあいだ。

昼食後は瀋陽故宮へ。清朝を興した太祖ヌルハチ

とホンタイジの皇居で、後金時代の建築である。

清の時代になって引き続き離宮として使われた。北京故宮と比べると12分の1の規模だが、女真族出身のヌルハチのころの土着性がある、とても趣がある。立ち並ぶ建物の中で、ヌルハチ専用の大政殿は八角形をしている。「何かを想像しませんか。移動式のゲルを模しているんです」。李さんの説明に、みんなうなずく。やはり遊牧の騎馬民族の出身であることの証左だ。



北陵公園内



瀋陽故宮・ゲルを模した八角形の大政殿



北陵公園内



張氏帥府内の張学良銅

そこから歩いて行ける距離に、張作霖・張学良親子の官邸であり私邸の張氏帥府（ちょうすいふ）があった。清朝滅亡後も瀋陽は満州軍閥の根拠地で、軍閥を率いたのがこの親子である。門を入ると中国の伝統的な建築である四合院、その奥に近代建築の大青楼がある。1914年の建築だから中華民国の頃だ。張作霖は日本軍との関係が深かったが、列車爆発で殺害される。関東軍によるものだとされており、日中戦争へつながる大事件だった。この後、息子の学良は国民党の支配下に入ることを宣言した。いわゆる易幟（えきし）である。国民党は現共産党政権にとっては敵に当たるが、学良は身を賭して西安事件

を起し「国共合作」を成し遂げた功績が評価され、今の中国でも英雄扱いされているそうだ。

思いのほか観光客が多かったのは、そうした親子の功績の資料が展示されているからだろう。満州時代の建物がそのまま残る旧奉天ヤマトホテルも見学。今も遼寧賓館というホテルとして使われ、そのヨーロッパ・ルネサンス様式の優雅で気品ある建築と内装に見とれてしまった。「李香蘭が活躍したころのものです」という



瀋陽故宮で記念撮影の訪中団員

李さんの説明に一同、ため息が出た。中国は満州時代の歴史的建造物をそのまま今も使っている。東京駅を手がけた辰野金吾（唐津出身）の弟子、太田毅が設計した旧奉天駅の瀋陽駅もそうだ。「やっぱり、どこことなく東京駅に似ているね」と誰かの声が聞こえた。

（文責・県日中編集部）



遼寧賓館・旧奉天ヤマトホテル



遼寧賓館のルネサンス様式の気品ある内装



どこことなく東京駅に似ている瀋陽駅（旧奉天駅）

訪中団帰国報告

第4回「満州国首都の面影・長春」

【本文】

東北地方は中国有数の穀倉地帯である。訪中団がその大平原を見たのは、中国入りして3日目、瀋陽から吉林省長春までの高速鉄道の車窓からだった。トウモロコシが多いというが、何かの切り株ばかりが果てしなく広がる。「昔、在来線に乗った時は雄大な夕日の光景を見たよ」。今回、団の秘書長である堤清行・県日中理事長（84）が語る。みんな食い入るように広大な風景を見つめていた。



高速鉄道列車（長春西駅）



日本の国会議事堂に似た満州国国务院庁舎
現吉林大学基礎医学院



旧関東軍司令部・現中国共産党吉林省委員会

戦前、満鉄自慢の超特急「アジア号」は世界最速と言われ、最高時速120kmを出したが、今の高速鉄道は300km。その朝、1時間ほどで長春西駅に着いた。街路樹は幹が白っぽいポプラだが、街にはアズノの木が多いという。「冬はマイナス30度。桜は寒さに弱いので育たない」と現地ガイドの張さんが教えてくれた。

長春は人口700万人。満州国建国以前は10万に満たない都市だった。存在感を増したのは新京という名で満州国の首都になってからである。奉天（瀋陽）は張作霖・学良親子の軍閥支配の拠点、ハルビンはロシアの影響が強すぎ、吉林は満鉄の本線から外れているので、政治的に色のついてない新京が選ばれた。バスで巡るととにかく道路が広い。いかにモデル都市として造られたかが分かる。かつての官庁街には満州国の国务院庁舎がそびえ立っていた。今は吉林大学の病院が入っている。「どこか日本の国会議事堂に似ているね」と原田彰さん。どれもこれもスケールが大きく、建築の実験場という感じだ。

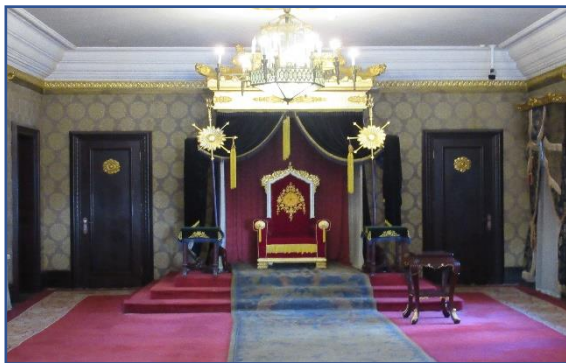
その中でも旧関東軍司令部は異色。日本の「お城」のような天守閣風の建物で、今は中国共産党吉林省委員会が使っている。警備が厳しいのでバスの車窓から眺め、カメラを向ける。関東軍は事実上の満州国の主権者であった。

皇帝・溥儀でさえ、関東軍司令官の許可なしには何も決めることはできなかったそうだ。

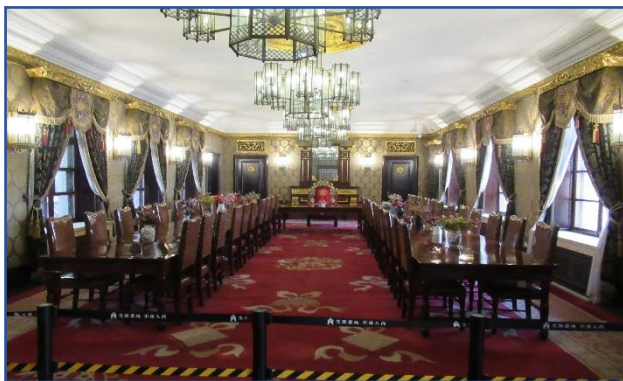
もちろん、今の中国は満州国の存在を認めてはおらず、「偽満州国」と呼んでいる。



偽満州国皇宮博物院入口



皇帝溥儀の玉座



皇帝溥儀の御前会議室

「偽満州国皇宮博物館」に行けば、その溥儀がいかに哀れな存在であったか、また満州国が日本の「かいらい国家」にすぎなかったことが見てとれる。ここは溥儀が政務をとる皇宮跡だが、もとは塩の専売局だった建物。「案外、こじんまりとしている」との声がもれるほどで、満州国のトップにふさわしいものとはいえない。関東軍はこの建物の左側に、映画「ラストエンペラー」のロケにも使われた仮宮殿を建設したが、溥儀は盗聴を恐れてほとんど使わなかったといわれる。官庁街に建設中だった新しい宮殿に、溥儀はついに入れないままに終わった。長春を歩くと、あちこちに中国がいかに外国支配にさらされ苦難の歴史をたどったかの痕跡がある。



皇宮博物館で団員記念撮影



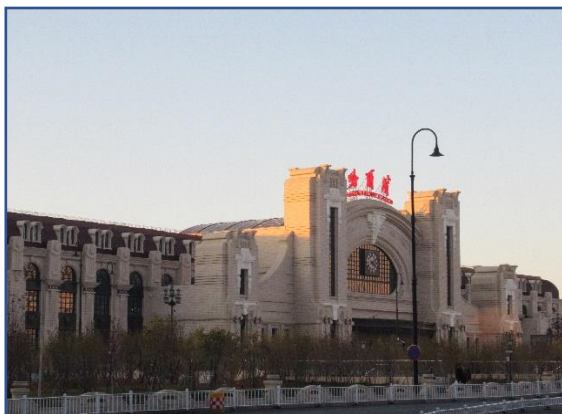
満州国紋章

満州国は日本、朝鮮、漢族、満州族、蒙古族の「五族協和」をうたいながら、実際は頂点に日本人が君臨した。「日本人にはあった白米や砂糖も中国人には配給されなかった」。

戦後、吉林から引き揚げたノンフィクション作家の澤地久枝が、差別の現実を著書にそう書いている。（文責・県日中編集部）

【本文】

黒龍江省のハルビンに着いたのは3日目の午後だった。近代的なハルビン西駅に着いてバスに乗り、まず目指したのはロシアが造った古いハルビン駅。車窓から見ながら、現地ガイドの藩さんが「ここは伊藤博文が暗殺された所です」と説明すると、歴史的事件を思い出すように団員がうなずいた。

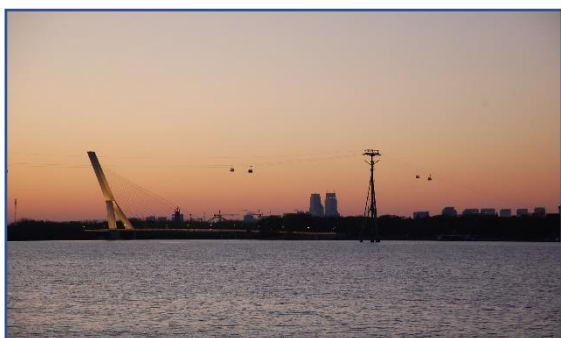


伊藤博文が暗殺されたハルビン駅

1909（明治42）年、伊藤は外遊途中のこの駅のホームで韓国の抗日活動家、30歳の安重根によって殺される。拳銃を放った後、安は誇ったようにロシア語を交えて「朝鮮万歳（コリア・ウラー）」と唱えたという。調べに対し、安は殺害の一番の理由に「伊藤サンノ指揮ニテ韓国王妃ヲ殺害シマイタ」と閔妃（みんび）暗殺事件のことを挙げている。確かに事件当時の首相は伊藤

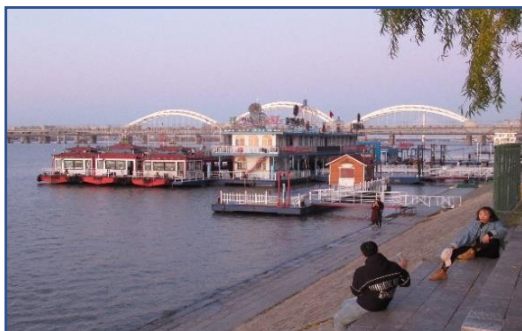
であったが、彼は強権的ではなく、むしろ韓国併合にも当初は反対だったとされている。伊藤が日本における元勳だったことから、安は朝鮮民族にとって義人となった。

そんな歴史のあるハルビンは、もともとは帝政ロシアが建設した都市。ロシアは満州地域に敷設権を得て建設した東清鉄道によって事実上、ここを支配した。それに対抗して火花を散らしたのが日本である。結局は豊かな産物と資源の奪い合いだ。ハルビンは満州語で「魚網を乾かすところ」という意味で、はじめは一寒村に過ぎなかった。松花江と東清鉄道の予定地が交わる地点にあり、舟運の拠点だったからロシアはここを重視した。



黒竜江最大の支流の松花江。対岸にロープウェー

その松花江南岸のスターリン公園からの眺めが素晴らしかった。内陸部なのに川幅は1kmもあろうかというほど広く、川を渡るロープウェーが夕日に映えてシルエットのようだ。北朝鮮の白頭山に発し、吉林とハルビンを通してロシア側に流れるアムール川（黒竜江）最大の支流だ。手を付けると水が冷たい。11月中旬になれば、もう凍るといい、冬はスケートでにぎわうそうだ。零下30度の中で滑る気分はどんなものだろう。



藩さんが「この公園は、朝は太極拳の場所になります」と説明すると、太極拳を趣味にする県日中理事の小島利津さん（伊万里市）が「ホテルから近かったら、私もできたのに」と悔やんで笑いが起きた。



ハルビン西駅から見た市内のビル群。



ハルビンノキタイスカヤ（中央大街）の夜景



ハルビンは1920年代、極東の欧米文化の中心地だった。ロシア正教会聖堂やアール・ヌーボー建築が立ち並ぶ国際色豊かな街で、「パリの流行は2週間にしてハルビンに飛ぶ」といわれた。そんな日本でいえば銀座のような通りが中央大街（キタイスカヤ）である。

もう夜だったが、歩行者天国のようになっている。榆（にれ）の並木には電飾がきらめき人であふれていた。石畳が続く。深さ1mの矩形状の石が隙間なく埋め込まれており、みんな珍しそうに写真を撮った。両側には「松浦洋行」など西洋風の装飾を施した洋館が「歴史建築」に指定され、エキゾチックな雰囲気を醸し出している。「ここは、しゃれてるわ」。そんな声が出るほど洗練されていた。「海のない上海」と言われるのも、うなずける。

一行はそのまま歩いてロシア料理店へ。生バンドの演奏を聴きながら、ワインの杯を重ね、夢のような心地でハルビンの夜が更けていった。（文責・県日中編集部）



ハルビン市街のイルミネーションが綺麗だった。

訪中団帰国報告

第6回「悲劇の地・方正へ」

【本文】



今回、訪中の目的の一つは、ハルビン郊外の方正（ほうまさ）県にある「日本人公墓」に参拝することであった。公墓は、先の終戦時の引き揚げ途中に死亡した日本の旧満蒙開拓団員が眠る共同の墓だ。日中友好協会には、開拓団員を慰霊することで日本と中国の間に横たわった苦難の歴史をたどり、今後の両国の友好事業に役立てたい、との思いがあった。

4日目の早朝、ハルビンのホテルをバスで出発し、目指すは190km余り東の方正県。高速道路を中国最東部の都市、ジャムスの方に向かってひたすら走る。道の両側にトウモロコシとコーリヤンの畑が果てしなく続いていた。家がポツリ、ポツリを点在し、どの家にも煙突がある。「冬には暖房のため石炭をたくのだろうね」。だれかがつぶやいた。この風景は昔とあまり変わらないと思わせる。そして、この地で多くの開拓団の人たちは命を亡くしたのである。終戦末期、敗走の大陸で何が起きたのだろうか。

「満蒙開拓団」。満蒙とは「満州・蒙古（モンゴル）」を一つにつづめた和製造語だ。1931（昭和6）年に起きた満州事変から終戦まで、旧・中国東北部（満州）と内モンゴル地区に「国策」として送り込まれた入植者のことである。総数は27万人で、満州国崩壊の最大の犠牲者といわれている。全都道府県から送出されたが、その数は長野県がトップで、佐賀県からも1937年から39年の間だけでも2800人が満州に渡った（出典『昭和国勢総覧 上巻』）。この数は多い順に見て全国で上から26位であったから、けっして少なくはない。

日本政府が満州への農業移民をすすめたのは、農村の過剰人口対策や満州国内の日本人比率を高める必要があったからだ。また軍や警察に代わる治安維持の目的もあった。「満州に渡れば1戸あたり20町歩（約20ha）の土地が待っている」という国の呼びかけは、農民には抗し難い魅力もあったろう。実際には、村政の中核人物や中堅自作農などが、この移民を国民運動として村民に浸透させる役割を担ったとされ、必ずしも「貧しさ」だけが理由ではない（小林信介著『人びとはなぜ満州へ渡ったのか』）。

問題はこの国策が中国の農民の恨みを買ったことだ。関東軍が満州国との了解を無視して、全てではないが、耕している農地を強制的に時価よりかなり安い値段で買いたたき、それがもとで開拓団はしばしば中国農民から襲われた。当然、治安は悪い。「われわれは騙（だま）された、とんでもないところへ来て了（しま）った」。『満洲開拓史』（満洲開拓史復刻委員会編）には、現地農民に迎え撃たれた開拓団員が悲痛の言葉をもらす場面の記述がある。

さらに終戦直前のソ連軍の参戦で、開拓団は中国農民に略奪され、開拓団員を守るはずの関東軍は参戦の事実さえ知らせず、置き去りにした。まさに「国家の盾」であり、「棄民」である。そのころの開拓団は、壮年の男性のほとんどが徴兵され、女性と子ども、老人しか残っていなかった。そんな中での逃避行であり、引き揚げの悲劇であった。方正県の日本人公墓には、こんな背景があったことを知っておく必要がある。（文責・県日中編集部）



方正の田園風景



中日友好園林

のどかな農村風景が広がる黒竜江省の方正県に入るとバスが止まった。現地ガイドの瀋さんが「ここからはバスでは行けません。乗用車に乗ります」と言って、手配された数台の車に分乗。しばらく行くと、白い門に「中日友好園林」と書かれた一角に到着した。辺りは稲田で、トラクターが通るような、のんびりした所であった。

いつもは門が閉めてあるそうで、管理している方正県人民政府の役人が開けてくれた。静かな林の中を行く。その先に日本人公墓と、日本人養父母公墓があった。墓碑は高さ3m弱というところか。日本人公墓の方は1963年に建立されたもので、「1945年亡故」と彫ってある。日本の開拓団員の中には、引き揚げの途中でやむなく中国人に子どもを託した人もいた。養父母の墓は、のちに中国残留孤児として日本に戻った子の一人が、「敵の子なのに立派に育ててくれた」養父母のことを思い、恩返しとして建てたものという。訪中団のメンバーは息をのんだようにして墓をじっと見つめ、手を合わせた。

「いったい、ここで何があったのだろう」。それはみんなの共通した思いだ。園林の敷地の一角に「陳列館」という資料館があり、そこにはざっとこんなことが書かれていた。戦前、方正県には4つの開拓団があり256世帯、2114人がいた。さらに東の都市、ジャムス付近の開拓団員は終戦直後、方正を経由して日本に帰国しようと逃避行を続けたそう。方正に集結した団員は1万5千人余りに達し、寒くなる

につれて疫病、飢餓、自決によって次々と亡くなり、

その数は5千にもなった。日本にある「方正友好交流の会」によれば、新中国樹立後、残留婦人たちが白骨の山を見つけ、自分たちで葬る願いを県政府に訴え出た。県政府への嘆願は黒竜江省政府を経て中央政府へ、そして最終的には当時の周恩来首相までいき、周総理が日本人公墓建立を決断したのだという。

旧満州生まれで、同じ引き揚げ組の江原道郎さん〈79〉は「無念だったろうね」とポツリ。中島明彦さん（74）は「父の知り合いの人がここに眠っているかもしれない…」と絞り出すように語った。だれかが「でも、ここは静かで良い所だ。団員さんたちは安らかに眠っているのじゃないかな」と救いの言葉をかけた。

ハルビンまでの帰りのバスの中でのこと。重い空気が漂う。「戦争の悲惨さが迫ってくるような、大変な所だった。みんな日本に帰りたかったろう。国の暴走が恐ろしい」と言ったのは原田彰さん。そして中国残留孤児を題材にした山崎豊子の小説『大地の子』を思い出し、「大地の子とはよくつけたものだ。現地に来ると、本当に大地そのものというのが分かる」と感に堪えたように話した。



方正の街並み

県庁OBで佐賀地区日中の会員、大西憲治さん（72）＝佐賀市＝は締めてきた黒のネクタイを触りながら「適当か分からないけど、南無阿弥陀仏と唱えたよ。開拓団のご苦労を思うと涙が出る思いがした。でも想像もつかないね。想像を絶する…。私たちはここまで来たかいがあった」とため息とともに語ったのが強く印象に残った。みんなが、この地に足を運ぶ意義の深さを改めてかみしめたのである。（文責・県日中編集部）



中日友好園林の門の前で訪中団の記念撮影

訪中団帰国報告

第8回「敏感な場所」

【本文】



日本人公墓にはもう一つ、歴史の事実がある。過去、共同通信が配信した記事をもとに再現してみる。この「中日友好園林」には長野、埼玉、山口県などの開拓団死亡者約250人の氏名を刻んだ慰霊の石碑があった。

石碑は日本側の情報提供をもとに、方正県人民政府が2011年、公墓のそばに約70万元を投じて建てたものだった。しかし、中国メディアやインターネット上で批判が噴出。赤いペンキをかけられ、県政府が「処分」したという。尖閣問題で対日感情が悪化した頃だ。「中国人の犠牲者ではなく、費用を負担してまで日本人を慰霊するのはおかしい」ということだったのかもしれない。以後、この園林は地元政府にとって敏感な場所になったようだ。

今回、中国側から訪中団を中に入らせることはできるが「公墓に線香をあげたり花を手向けたり、写真を撮ったりはできない」と事前に言われていた。地元の役人が立ち会ったのもそのためだろう。結局、訪中団は従ったが、だれかが「せめて線香の1本ぐらいいはあげたかったね」と言った。両国の間に横たわる歴史問題という、やっかいな事柄を現認させられた感覚だった。いつか解決できる日を信じる、との思いを訪中団員は胸に刻んだ。

4泊5日の旅が終わろうとしていた。ハルビンから瀋陽に戻り、そこから空路、韓国・仁川空港を経由して福岡へ。団員の胸中には、それぞれの思いが去来していた。飛行機の中や、乗り継ぎの仁川で、この旅を通して自分なりに振り返ったものが口をついて出た。

しみじみと「来て良かった」ともらしたのは江原道郎さん（79）である。旧満州の通化（現吉林省）に生まれたことは紹介した。「引き揚げた土地を自分で見ておきたかった」というのが訪中団に参加した動機だ。父親は今の佐賀市出身で、旧満州に渡って営林署勤務だった。まだ5歳だったが、「終戦直前にソ連が侵攻してきてからの慌しさが記憶に生々しい」という。父は郊外まで使役に連れて行かれ、昼時になると母が弁当を届けに行く。一人で留守番をしていた時だ。2人のソ連兵が拳銃を持って土足で家の中に入ってきて、天井裏までひっくり返した。怖さに震える思いだったそうだ。終戦の報が伝わった翌日、前日まで仲良く遊んでいた中国人から石を投げられたことを覚えている。

1年かけて佐賀に引き揚げたが、列車に乗れても覆いのない貨車で、すし詰め状態。夜、雨が降っても濡れたままで、途中、降りて馬小屋に干し草を敷いて寝たり、食べ物といえどコーリャンと水ばかり。今の遼寧省のコロ島から貨物船に乗った時はほっとした。「あの時の安堵感は忘れられない」。しかし、着いた博多で弟は栄養失調で亡くなったという。

江原さんは「肌を刺す寒さとか広さ、自然の厳しさとか、当時の感覚を思い出した」と言い、「やはり方正が印象深い。一步間違えれば私も同じ運命だった」。戦後、両親は満州時代のことは、あまり話しながらなかったという。その「沈黙」に、父母がなめた辛酸を思うのだ。「機会があれば、いつか通化を訪ねてみたい」。そう、とつとつと語る江原さんだった。

（文責・県日中編集部）

訪中団帰国報告

第9回「伝えていくべきこと」

【本文】

旧満州の北安（現黒竜江省）で生まれた中島明彦さん（74）も、江原さんと同じ引き揚げ組。「歴史を感じる旅だった」と振り返り、感慨を深くした一人だ。今回の旅で、かつてのソ満国境で暮らした日々がどんなものだったかを想像した。

父親が現地の農産公社に勤務していて、1944（昭和19）年に姉が疫病で亡くなった。終戦になって両親とともに3人で引き揚げたが、当時はまだ1歳で記憶はない。韓国の釜山から船で佐世保に着いた。聞いた話では栄養失調の状態だったという。乗り物に乗ると、両手を前に差し出し「お頂戴」をする癖がついていたそうだ。「引き揚げの時に、よほど腹が減っていたんでしょう」と話してくれた。

江原さんの両親と同じように、中島さんの父親も満州時代のことはほとんど語らなかった。「ただ、ソ連兵のことを蔑称で呼び、彼らが家の中に入って来た、とだけ言っていた。当時の日本人の苦労を思い、私も方正では、ぐっとこみ上げるものがありましたね」。

中国行きは今回で7回目。東北地方は大連に1回行ったことがあるが、「瀋陽、長春など経済発展が著しく、ビルが林立していて、抱いていたイメージと違った。これだけの資金力がどこからくるのか」と中国の大国ぶりが印象に残った様子だった。「一党独裁でないと、この大国を引っ張っていけないのかな。方正まで行けば、貧富の差は感じましたけど」と話す。中島さんの長男は大連の大学に進んだという。「私が勧めました。旅をさせるつもりで、中国へ行ってこいと」。生まれたところが中国であり、何かしら大陸への憧憬みたいなものがあつたのかもしれない。

県日中にとっては5年ぶりの訪中団だった。帰りの飛行機の中で堤清行理事長は「最初は団員集めを心配したが、それぞれの思いがあり、おそらく満足してもらえたのでは。みんなで協力して無事に終えられたのが良かった」と肩の荷を降ろしたように話した。さらに県と歩調を合わせて遼寧省政府、民間の遼寧かささぎ会と交流できたことを収穫に挙げる。「単なる観光旅行ではだめだ。省政府が無理なら中日友好協会の地方支部と会談するなど中国側と交流しないと。国際交流は草の根でやることに意義がある」。

団長として12人を率いた篠塚周城会長も「方正の日本人公墓を中国の人たちが管理、世話をしてくれていることに強い感謝の気持ちを持った。このことは後世にしっかり伝えていかないといけない」。県日中友好協会としての役割を説いた。

方正にまつわる事実は日本ではあまり知られていない。かつては中国残留孤児の問題が盛んに語られたが、今では忘れられたようになってしまった。「国策」の名のもとに敗戦により置き去りにされた満蒙開拓団員27万人のうち、飢えや病気などで8万人が犠牲になったとされる。その悲劇を語り継ぐこと、歴史を知った上で、国際交流を進めていくことが、日本の社会の多様性を確かなものにする。国際化とはいいいながら、どこか内向きな今のこの社会にあって、多文化共生の意義を強調して、しすぎることはない。「一衣帯水」の関係の日本と中国の草の根交流も、その中の大切な要素であるはずだ。（文責・県日中編集部）

訪中団帰国報告

第10回「番外編・飲食の話」

【本文】

国際交流をしながら見聞を深めた訪中団。観光の合間に現地の料理を食べるのも旅の楽しみだった。最後は番外編として、食や酒にまつわる気楽な話で閉めてみたい。



老边饺子馆で絶品の餃子に舌鼓



方正での田舎料理



ホテルでの最後の食事

瀋陽入りしてすぐの夕食は餃子の名店「老边饺子馆」でとった。清朝の1829年の創業で、世界で最も長い歴史を刻む餃子店。日本では焼き餃子ばかりだが、こちらは蒸すのが一般的で、現地ガイドの李さんは「家庭では残ったら焼き餃子にします」とのことだった。

出てくるわ、出てくるわ、蒸し餃子が10種類ほども並んだ。それぞれ餡（あん）が違い、牛肉や鴨肉、野菜ならセロリやヘチマ、ピーマンだったり、パ

クチー（香菜）味がしたりと多彩だ。本場だから、もちろんうまいのだが、「仁川からの機内食を食べない方がよかったね。全部は入らないよ」。誰かがこぼし、一同から笑いが起きた。

この店で出た餃子入りの火鍋も珍しかった。東北地方の火鍋は有名で、李さんによれば、満州族はもともと遊牧民なので、羊を殺してその場で鍋に肉を入れて食べたい。四川の重慶火鍋と違って辛くない。本式は羊肉や野菜を煮て、ゴマ味噌に湖南省特産の臭豆腐、ニラの花味噌を混ぜたタレにつけて食べるのだそうだ。考えただけでも生唾（つば）が出る。老边

餃子馆の羊肉のスープは羊の骨から出る野趣に富んだ風味があり、遊牧の民の味がする。吉田寿次さんは「これはおいしいねえ」と感嘆の声を上げていた。

長春や方正で食べたのは現地の農家料理。都市部は薄味だが、田舎は少し砂糖と塩が多い。

それだけ汗をかくからだろうか。方正では昼食に13品のおかずと白飯が出た。炒め料理は野菜がたっぷりて長マメ、ピーマン、玉ネギ、キクラゲ、モヤシ…。食べきれないほどの大盛りにするのは、おもてなしをする現地の習慣だ。「全部食べたら、足らなかったと思われるでしょ」と李さん。高級食材は使っていないが、どれもこれもが舌に合った。東北地方の料理は「満州族と山東省の料理が融合したもの」と言ったのは長春の瀋陽の現地ガイドの張さんだ。

勝見洋一の『中国料理の迷宮』によれば、山海の食材に恵まれた山東省の料理は淡く、雑味がなく繊細。多くの料理人を輩出し、清朝の宮廷に入り、かつての北京料理は山東料理のこととさえいわれた。ロシアが満蒙の地に東清鉄道を敷設する際に、山東省から多くの労働者が来たこともあって融合が進んだのかもしれない。



ハルビンでのロシア料理



ロシアのフルーティーなワイン

道中、街中に干してある白菜や、白ネギを満載したトラックを見かけた。白菜も白ネギも冬の保存食。満州時代から特産の白菜を甕(かめ)に塩を入れて漬け、自然発酵させた「酸菜」は、李さんによれば、酸っぱくてとてもおいしい漬物だという。

そういえば、老辺餃子館で、この酸菜入りの餃子が出たことを思い出した。

酒はビールと紹興酒をよく飲んだ。現地の地ビールはアルコール度数が2・5%ほどで軽い。強い酒の白酒は寒いハルビンでも、最近は健康に気をつけてあまり飲まないそうだ。ハルビンのロシア料理店で出たワインがフルーティーで甘く、どこか花の香りもして、みんながほめた。ロシア産なのだろうが、ふっと窓から西洋の風が吹き込むようで、ひととき陶然とした気分にしてくれたのが印象深い。＝終わり＝（文責・県日中編集部）

（主な引用文献・参考文献）

- ◇『人びとはなぜ満州へ渡ったのか—長野県の社会運動と移民』小林信介（世界思想社、2015年）
- ◇『満蒙一日露中の「最前線」』麻田雅文（講談社選書メチエ、2014年）
- ◇『中国東北部の「昭和」を歩く』鄭銀淑（東洋経済新報社、2011年）
- ◇『中国残留邦人—置き去られた六十余年』井出孫六（岩波新書、2008年）
- ◇『14歳〈フォーティーン〉満州開拓村からの帰還』澤地久枝（集英社新書、2015年）
- ◇『隣国への足跡』黒田勝弘（角川書店、2017年）
- ◇『図説「満洲」都市物語—ハルビン・大連・瀋陽・長春』西澤泰彦（河出書房新社、2006年）
- ◇『観光コースでない満州—瀋陽・長春・ハルビン・大連・旅順』小林慶二（高文研、2005年）
- ◇『中国料理の迷宮』勝見洋一（朝日文庫、2009年）
- ◇公益社団法人日本中国友好協会機関紙「日本と中国」2018年8月号～12月号の連載記事「方正にある日本人公墓とは何か？」（大類善啓・方正友好交流の会理事長）